
母の会のもち方の技術

— フィルム・フォーラム —



関 計 夫

一、映画を中断して話しあう

母の会のもち方のひとつは、映画を見ることであろう。映画によっては、ただ見ればなしでよいものも少なくない。あと

て話しあいをする、折角の感動がうすらいでしまうこともないではない。音楽映画の場合など、ことにそうである。「シンフォニー・オヴ・ザ・エイア」というオーケストラの映画があるが、これなど見ただけで、その感動を十分に暖めておいたほうがよい。

しかし、映画によつては、考えさせるものがある。そんな時は見るだけでなく、話しあうことが益がある。牛島義友氏の話によると、フランスではふつうの常設館でも、映画が終ると、だれかが壇上にあがって司会し、感想を交換しあう。夜おそいのに、一人もそれをいやがって帰るものがいなかったという。そういう態度は日本でも見習ってよいであろう。

しかし、話しあいをするにしても、やり方を工夫することが必要である。まず、主催者はあらかじめ試写しておいて、どこに問題点があり、どこに注意をそそがせようかと考えておく必要がある。

場合によつては、映画を途中で中止し、そこで話しあいをしてから、映画を続行することも有効である。

たとえば、「木のほり」という映画がある。これは田舎の子どもが林のなかを歩いていると、飛行機が何台もあらわれる。が、木立によつてよく見えない。すると、一人の子どもがたちまち近所の木

によじのぼり、天辺近くの枝に足をかけて、飛行機を見物した。しかし、飛行機が過ぎてしまい、木から下りようとすると、こわくなくて降りられなくて困ってしまう。

ここで映画を中断し、司会者がみんなの前に座って、「いま見た映画についてこれから話しあいをお願いします」と司会する。問題点は二つある。

一つは、子どもはどうして降りられない木にのぼるか、その心理である。それについては子どもが危険と安全の区別を知らないこと、のぼる体験と降りる体験はまったくちがうこと、子どもはおとなに較べると立体的な生活空間があり、おとなのように平面的体験だけではまんぞくしないこと、などが語られる。この場合にリソース・パーソンとして心理学者がいるといい。

なお、これについて似た経験を語りあうのも有益である。屋根にのぼるとか、ロック・クライミングの経験などを持っている人もいるかもしれない。そのように、「木のぼり」だけでなく、それと似たものに発展するならば、映画の経験がいつそう一般化するであろう。

もう一つは、このような場合に、親としてはどういう処置をとるべきか、ということである。ある人は下からのぼって行って、静かに降ろしてやるであろう。ある人は下を見ないで、スルスルと下りるように教えたらよいであろう。ある人は「危い！」

というような声を下から掛けることは却って当人を不安にするから、なるべくそっとしてやるほうがよいであろう。

このような話し合いをして、「それでは映画ではどうなっているか、続きを見てみましょう」といって、この話し合いをうちきる。

映画では、友だちが下で待っているが、その中の一人が「ちょっと待って」といって駆けだす。どうするかと見ていると、やがて大きな、梯子をもって帰ってくる。そして梯子を木にかけ、みんなで安全なように梯子をおさえて、降してやる。なるほど、こういう解決もあるものだな、と観衆は納得する。

これは安全教育の映画であるが、子どもにはこのように危険な場面での具体的指導がたいせつである。「自動車に気をつけなさいよ」というような抽象的な注意では役だたないのである。「木のぼり」は子どもに見せてもいい映画である。

二、映画を見てパネルをやる

これは第一段階 フィルムの紹介、第二段階 映写、第三段階 フィルムにおける問題の提示、——これはフィルムの評価ではなく、フィルムを通して、共通の広場を設定することである。第四段階 パネルの話しあい、第五段階 一般聴衆の参加、第六段階 司会者のまとめ、の順序でおこなわれる。

その例として、社会教育協会がつくった「子どもは見ている」と

いう映画を利用することができる。

まず、映画のあらすじを記そう。

「早く起きろよ」と子どもを促している父親がノウノウと寝床にねそべっている。子どもがきれいに掃きためたゴミを、父親がチリトリに移さずに、隣家のほうにかきちらす。ミゾのドロをくみあげて置きざりにする隣家の小母さん、それにつまずいて子どもが白い靴をよごす。汽車の発車まぎわに駅にかけつけ、待っている子どもをハラハラさせる父親は、子どもに「えらいだろう」と自慢する。

電車の座席にわりこむあつかましい母親、大きな声でじぶんの子を自席に呼ぶ母親、車内でタバコをすう父親、わが子の落書はしかるが、他人の子の落書は見えて見ぬふりをする母親。近所の奥様のきものがよいとお世辞をいったあとから、「いやんなっちゃうわ。まるで芸者みたいじゃないの」という母に対して、「そんならほめなればいいのに」と子どもは作文にかく。

オムニバス式にくりひろげられるおとなの二重生活に抗議する子どもたちは、学級会で乱闘をはじめめる。

この映画は社会教育に関したもので、おとなの民主的道德について反省を求めするために作られた映画である。そしてつくられた当時（昭和三十年）新聞で大きくとり上げられたものである。

この映画を見て、波多野完治氏司会の下に、高校生二人、母親代表二人、父親代表一人、小学校および中学校教諭、駒田錦一氏の八

人のパネル・メンバーで話しあいをしたことがある。

まず、司会者から、いまの映画についての感想を子どもからはじめて一通りメンバー全員に言わせる。それを司会者が第一、子どもとおとなの関係、おとなが子どもを愛するがために起こる問題、第二、おとなが育てられた時分の道徳観念がこんにちには通用しなくなっている問題、第三、おとなが利己主義である問題、の三つにしばらく、あらためてこの三つの問題について、一つ一つ話しあいをした。そして、そのあとで聴衆とパネル・メンバーとの間に話しあいを行なった。

パネルと一般聴衆の参加は、時間を一時間として、三十分ずつが適当である。司会者はみんながなごやかな雰囲気話しあえるように留意する。メンバーは意見が異なっても、相互の意見の相違がたがいに理解され、容容な精神で、AはBを、BはAを扱うようになれば、それは成功である。だから、討論の結果、すべての人が同一結論に達することは必ずしも必要ではない。

このパネルでもいろいろな意見がはずんだが、さいごに司会者は「子どもが見ているというので神経質にならずに、天真らんまんにやりましょう」と結んで、終わった。

三、映画を中断してロール・プレイをする

映画を見て話しあいをするだけでなく、ロール・プレイをする方

法がある。

「子どもたちの目」という教育映画がある。これは中学二年のホーム・ルームの時間に、受持ちの先生が、「わたしたちの家庭」という題で、心理劇をさせたものである。男の子が勉強している。そばには品物が床上にちらはっている。そこへお父さんが会社から帰ってくる。

父「あした試験か？」

子「うん」

父「お母さんどうした？」

子「PTA」

父「PTA、PTAって、しょうがねえなあ」

父「こんなに荷物散らかしちゃ、いけないなあ」

子「ぼくが散らかしたんじゃないよ」

父「自分が散らかしたんじゃないよって、片つけとけばいいの

に」

父「なんかかないかなあ」

といいながら、戸棚をさがす。そこへ母が帰ってくる。

母「あら、お父さんお帰りにさい。早かったわねえ。ちゃんとそ

うおっしゃって下さればいいのに」

父「だって会社の都合で急にそうなるんだから、しかたがないじ

ゃないか。お前こそPTAがあるならあると、そういつとけば

いいのに」

母「子どもが朝になってから、あなたがお出かけになったあとで急に、きょうはPTAがあるといったんですよ。しょうがない

じゃありませんか」

父「PTA、PTAって、PTAとおれの用とどっちがたいせつなんだ？」

以上のようなロール・プレイを見ると、おとなの生活がそのまま子どもの目を通して演じられていることがわかる。だから、おとなはこれを見て大いに反省するだろうし、自分たちの無思慮な生活が子どもにどんなに大きな影響を与えているかを知って、ゾッとするであろう。

ところで、映画はこんどは子どもが理想的な家庭を演じている。

想定はままと同じである。それは同じ子どもたちが前とは全くちがった演技をするので、思わずほほえましくなる。しかし、ここで映画を中断し、母の会をいくつかのグループにわけて、理想の家庭について話しあいをさせる。そして父、母、子の三人の役をする人々をきめ、ロール・プレイを演ずることにする。そうすると、同じ理想の家庭にしても、グループによって多少の違いが出てくる。それらを見ているうちに、自然と自分たちの考えがふかめられてゆく。

さいごに、映画を続行する。映画ではだいたい次のようになって

いる。

父「あした試験か？」

子「うん」

父は子どもの机をのそきこみながら、

父「何かわからんところがあつたら、教えてやろうか」

子「うん、ない」

父「お母さんどうした？」

子「P T A」

父「荷物が散らかっていたら、気がついた者から拾うようにする

といいなあ」

といいつつ、父白から床上の荷物をひろって片づける

そこへ母がP T Aから帰ってくる。

母「あら、お父さんお帰りなさい。きょうは早いのねえ」

父「会社が早くひけたから、早く帰って来たんだ」

母「そうお、よかったわねえ。お疲れになつたでしょう」

父「君こそ、P T Aで疲れただろう」

母「じゃあ、いそいで何か作りますからな」

父「手伝おうか」

母「ようございます」

ここで父、新聞をとって読みはじめ

子ども立って、教科書を持って、父のもとにいき、

子「これ、ちょっと教えて下さい」

という。

一家が和気あいあいとして、たがいに助けあう家庭を、子どもは理想にえがいている。

わたしは何回かこの映画を母の会につかった。その経験によると、おとなのロール・プレイだけにしておいて、映画は続行しなくてもよいにも思う。このように、映画は必ずしも全部上映する必要はない。目的に応じて、一部だけ見せてもよい。アメリカでは、五分とか、十分とかいう短い映画を多く用いている。この点のみじかいは物たならなく思うものは、考え直す必要があるであろう。

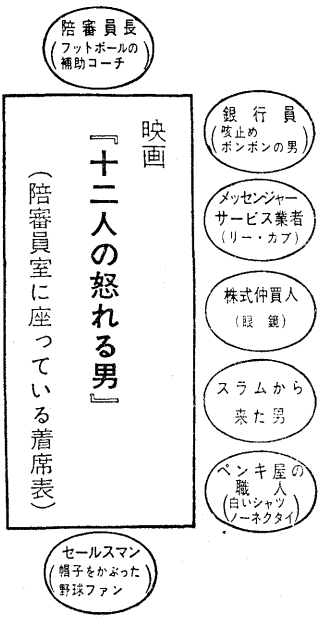
四、映画を中断して、予測させる

さいごに、第七回ヘルリン映画祭最優秀作品賞、フランス映画アカデミー大賞その他かずかずの賞をうけた「十二人の怒れる男」というアメリカ映画を利用しての母の会の進め方について述べよう。

この映画は日頃から不良と目されている十七歳の少年が実父をナイフで刺殺した容疑事件について、十二人の陪審員が評決することと取り扱ったものである。陪審制度は全員一致で有罪か無罪かを判定せねばならない。一人でも不一致のものがあれば、話し合いをつ

づけて、全会一致に到達しなければならない。

第一回の評決は十一対一で、有罪を主張する者が圧倒的に多かった。しかし、建築技師（ヘンリー・フォンダ）だけは、有罪とする証拠が不十分だとして無罪に投票した。そこでメッセンジャー・サービス業者（リー・コブ）が証拠をよみ上げた。殺人部屋の真下に住んでいた老人が「殺してやる」と怒鳴った少年の声を聞いたこと、その後人の倒れる物音がしたこと、老人は被告が階段をかけた下りるのを見たこと、警察は被告がその時間に映画を見ていたということが、どんな映画だったか思い出せないことである。これに対して、



他の一人が殺人部屋と相対して住んでいるオールド・ミスが折から通過した空列車の窓を通して殺人を目撃したと主張し、第三の陪審員はアバートの住人たちは親子がその晩ケンカしたことを証言したと主張した。

これに対して、建築技師はこれらの証拠がいずれも不十分であると反対した。ここで第二回の評決がおこなわれるのであるが、ここで映画を中断する。この映画は評決をくりかえすごとに、一人ずつ無罪投票がふえて、さいごには全員無罪投票をするのであるが、その順序を母の会の人かひとりずつ自分の考えで表に記入させる。その後、いくつかの小集団にわかれて話しあいをし、グループとしての順序をきめて、この表の右側に記入する。この二つが記入し終わったならば、映画を続行して、映画における無罪投票の順位を発表し、それを(I)に記入する。

一例として、実際に行なった結果を記入したのが次頁表である。表中、(IV)は自分と映画の順位差であるが、この値が小さいほど、自分の観察が正確であったことを物語る。(V)はグループと映画の順位差であるが、この値が小さいほど、グループが正確であったことになる。(VI)はグループと自分の順位差であるが、これが小さいほど、グループに対する自分の影響力が大きかったことを意味する。さて、(IV)は総計三六、(V)は総計一八である。したがって、この二つから、グループの判断のほうが、自分の判断よりはるかに正確で

映画『12人の怒れる男』について

集団決定への影響表

	無罪、投票をする序列			差 異		
	(I) 映 画	(II) 自 分	(III) グ ル ー プ	(IV) 自分と映画 (II)と(I)	(V) グループと 映画 (III)と(I)	(VI) グループと 自分 (III)と(II)
陪 審 員 長	9	5	11	4	2	6
銀 行 員	5	6	3	1	2	3
メッセンジャー・ サービス業者	12	2	6	10	6	4
株式仲買人	11	7	12	4	1	5
スラムから来た男	3	3	2	0	1	1
ペンキヤの職人	6	8	7	2	1	1
セールスマン	7	9	8	2	1	1
建築技師	1	1	1	0	0	0
おとなしい老人	2	4	4	2	2	0
ガレージの主人	10	11	10	1	0	1
時計屋	4	12	5	8	1	7
宣伝広告業者	8	10	9	2	1	1
				総 計 36	総 計 18	総 計 30

あることがわかる。「三人よれば文珠の智慧」に似た結果が出たわけである。

(IV)の総計三六、(VI)の総計三〇であるから、自分のグループに対する影響力が大きいことがわかる。自分が間違っているのに、その間違っている自分とグループの差が小さいのだから、これはグループを自分の間違っている方向にひきずったことになる。もし、反対に(IV)が(VI)より小さいときは、自分のグループに対する影響力が小さいことがわかる。

(V)の総計一八、(VI)の総計は三〇であるから、グループの判断は比較的正確で、この正確なグループの判断は自分の判断を同調させたことがわかる。

このように、統計的処理について、集団決定と自己決定の関係をしらべることが興味がある。そしていくつかの小集団の結果を板書して、どの集団がもっとも正確であったかを比較してみるがよい。それはおのずから、自分はどうしてまちがったか、グループはどうして判断したか、などと話し合いはつきないであろう。

十二人の似顔と座席はあらかじめ周知徹底させておく注意をのべて、本稿をおくことにする。

☆ ☆ ☆

(九州大学)